

---

# 仮面ライダーヤイバ<sup>final</sup> 雷対影 時空大決戦

ターザン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面ライダーバイファイナル 雷対影 時空大決戦

### 【Nコード】

N9300U

### 【作者名】

ターザン

### 【あらすじ】

突如現れた謎の4人のライダー組織『シャドウ』  
時空を超え今やイバの最後の戦いが始まる。

## 謎のライダー

バコン！！

蒼牙「違うつて言ってるだろ！？たたくなよ！？」

アイリ「違つてても違つてなくても一発は叩かせなさい！！」

蒼牙はアイリに頭を叩かれた、理由は一つ、蒼牙のYシャツに口紅がついていたからだ。

蒼牙「はぁ・・・プロトにメデューサの次は鬼嫁か・・・」

バコン！！

蒼牙「痛いっ！？」

アイリ「だぁあれが鬼嫁ですつてええ！？」

「???」  
「おい。」

家の玄関に龍一が立っていた。

龍一「新婚生活満喫はいいがそろそろ出勤だぜ蒼牙？」

蒼牙「まじかもうそんな時間！？」

アイリ「えっ、今日は休みのはずじゃ・・・」

蒼牙「急に仕事が入ったんだ、ごめん!!」

蒼牙は龍一と共に家を出た。

アイリ「……………」

アイリはふと結婚式の時の写真を見た。

アイリ「せっかく結婚してずっと一緒にいられるのに仕事ばかりでちっともそばにいてくれない……………」

アイリはため息をついた。

アイリ「蒼牙のバカ。」

……………

蒼牙「……………」

蒼牙はいつもより元気がなかった。

龍一「どうした蒼牙？」

蒼牙「いや……………せっかく結婚したのにまだアイリのそばにいられてないなって思ってたさ。」

龍一「仕事場でいつも一緒じゃないか？」

蒼牙「そうじゃなくて、私生活だよ……………せっかくの休日なのに、悪い事したなあ。」

龍一「へえ、難しいねえ。」

蒼牙は落ち込んだ、するとどこかで銃声が鳴り響いた。

龍一「なっ、何だ!？」

蒼牙「あっちだ!!」

2人は銃声の鳴り響いた場所に向かった。

市民「うわあああああ!？」

???「・・・」

???「何だか盛り上がってきたなあおい!」

???「騒ぐのはやめなさい。」

???「ん?あれは・・・」

蒼牙と龍一が現場に駆けつけた。

龍一「警察だ!!銃声をならしたのはお前達か!？」

???「それがどうかしたか？」

蒼牙「お前達を逮捕する!!」

???「・・・逮捕?」

???「不思議な事を言うのねあなた達。」

蒼牙「いいからこつちに・・・!？」

すると蒼牙はいきなり胸を押さえ膝をつく。

龍一「蒼牙!？」

蒼牙「ぐっ・・・がつ!？」

???「!、貴様・・・ヤイバか。」

蒼牙、龍一「!？」

2人は驚愕した。

蒼牙「な・・・何で・・・はあはあ・・・」

???「なるほど!!あんならわかる・・・痛っ!？」

???「リーダーにそんな口のききかたはやめなさい。」

龍一「お前達何者だ!？」

???「教えてやろう。」

???達4人はベルトを装着した。

蒼牙「なっ!？」

龍一「まさか!?!」

????「変・・・身。」

????「へええんしいいん!?!」

????「変身。」

????「変身!?!」

「ヘル・トランス!?!」

「デス・トランス!?!」

「デッド・トランス!?!」

「ブラッド・トランス!?!」

4人は光に包まれ姿を変えた。

龍一「馬鹿な・・・奴らが・・・」

蒼牙「仮面・・・ライダー?」

蒼牙は何とか落ち着きを取り戻し立ち上がる。

????「三条色!?!仮面ライダーデスだ!?!よろしく!?!」

????「南条院マコ、仮面ライダーデッド。」

???「線條レイ、仮面ライダーブラッド!!」

???「仮面ライダー・・・ヘル。」

それは外側が黒、内側が赤のマントで身を包み緑の腕、赤い複眼、黄色の二本角、黒い体に緑のラインがある装甲をまとったライダー・ヘル。

黒い体に青いラインがある装甲、逆三角形の仮面、複眼のライダー・デス。

黒い体に黄色のラインがある装甲、黄色の複眼、ハート型のような形の仮面のライダー・バッド。

黒い体に紫色のラインがある装甲、複眼、カブトムシのような仮面のライダー・ブラッド。

蒼牙「何でお前達が!?!」

デス「何でつていわれてもよお、変身できんだからしゃあねえだろ?」

バッド「邪魔をしないでもらえる?」

ブラッド「俺達は世界を救いに来ただけだ。」

龍「なに?」

ヘル「・・・・」

ヘルはオオカマを取り出し投げ辺りを破壊しだした。



蒼牙「や、やめろ!!」

龍「このやろっ!!」

「change Y A I B A!!」

2人は仮面ライダーヤイバ、ケンに変身しヘル達を攻撃するが簡単に受け止められた。

ヤイバ「何が世界を救いに来ただ!!単なる破壊じゃないか!!」

デス「何だよ邪魔すんのかよ!？」

デッド「やるしかないわね。」

ブラッド「ああ。」

ヘル「……………」

4人はヤイバと距離をとりデスはメリケン、デッドはムチ、ブラッドはナイフを構える。

ヤイバ「絶対にとめる!!」

ケン「あたりまえだ!!」

ヤイバは剣をふるうがそれをデス、デッド、ブラッドが防ぐ、ケンの攻撃も同様に防がれてしまう。

ケン「あくまでもヘルには触らせないつもりか!!」

ヤイバ「なら高速だ!」

「change dash!」

ヤイバはダッシュモードに変わり高速で攻撃を仕掛けるが

デス「だあああああ!」ビュンビュンうつつしいんだよ!」

デスは高速移動するヤイバをいとも簡単に殴りつけた。

ヤイバ「ぐあああああ!」

ケン「蒼牙!」

ブラッド「ほら!」

ブラッドはナイフでケンを斬りつける。

ケン「うわあ!」この・・・」

デッド「はっ!」やつ!」

デッドは遠距離からムチでケンを攻撃する。

ケン「ぐっ!」がはっ!」

ヤイバ「龍!」やめろ!」

「change SUN!」

ヤイバはサンモードになり炎の翼を広げ空中旋回をしようと飛び上がるが

デッド「ようは飛ばさなきゃいい!!」

デッドはムチを放ちヤイバの足に巻きつけ地面に叩きつける。

ヤイバ「ぐあああああ!?!」

ケン「この・・・やろう・・・」

デス「目障りだろあきらかにい!!」

デスはメリケンをはめ込んだ拳でケンの顔面を殴りつけた。

ケン「!!!!・・・」

ケンの仮面は碎け散りケンは叫び声もあげず倒れた。

ヤイバ「龍一!?!」

ヤイバは三人の攻撃を受け続ける。

ヤイバ「ぐ・・・」

ヘル「弱くなったものだ・・・私の力も・・・」

ヤイバ「お前の・・・力?」

ヘル「くたばれ。」

ヘルはオオカマでヤイバを斬りつけた。

ヤイバ「ぎゃあああああ!？」

ヤイバは変身が解け倒れた。

ブラッド「ふん。」

4人は変身を解いた。

色「ヤイバって言うから期待してたのによぉ・・・」

マコ「ワガママをいうのはやめなさい。」

レイ「所詮は・・・力不足だったって事だろう。」

ヘルに変身していた???は三人に言った。

???「行くぞ・・・救済だ。」

4人はヤイバとケンを背にむけ歩きだした。

next...

## シャドウ

謎のライダー達に惨敗した2人、それから数時間後・・・

蒼牙「・・・くっ・・・」

蒼牙は気づけば病院にいた、横にはまだ目を覚まさない龍一、そして何故か傷ついた榊原がいた。

榊原「大丈夫か？」

蒼牙「さ、榊原さん・・・何で・・・ぐっ・・・」

榊原「4人の黒い仮面ライダーが現れて・・・街を襲って・・・偶然お前達が倒れてるのを見つけたんだ。」

蒼牙「街を!？」

辺りを見ると傷ついた市民が苦しみの声を出していた。

蒼牙「ひどい・・・あれ、アイリは!？」

榊原「アイリさんは・・・家にはいなかった。」

蒼牙「そ・・・そんな・・・」

龍一「ん・・・」

龍一が目を覚ました。

榊原「龍一、目を覚ましたか。」

龍一「なんだ・・・どうなってんだ？」

すると

????「人間共よ。」

蒼牙達「!？」

蒼牙達は外を見ると謎の映像が空に映し出されていた。

龍一「あれは・・・あの時の仮面ライダー!？」

蒼牙「一体何をするつもりなんだ!？」

映像には4人の黒い仮面ライダーが映し出されていた。

色「よお!!俺達は世界を救済する戦士だ!!無駄な抵抗は・・・」

マコ「わかりやすく説明しなさい。」

レイ「リーダー、頼む。」

????が前に出てしゃべる。

????「我らは『シャドウ』、世界を救済する者だ。」

榊原「救済だと?」

???「今世界はつまらない事で戦争をし自ら世界を破壊しようとしている、我らはそれを終わらせに来た。」

蒼牙「なに？」

???「世界から破滅から救うためにお前達には少し犠牲になってもらう・・・そして我らに協力する者が現れた。」

シャドウに協力する者が映像にでた。

榊原「なっ・・・」

龍一「ウソ・・・だろ！？」

蒼牙「ア・・・アイリ！？」

それはアイリだった。

アイリ「警告する、死にたくない者はただちにシャドウに協力し服従せよ。」

蒼牙「アイリ！！何で・・・何で！！・・・！？」

蒼牙は再び原因のわからない胸の痛みを感じ膝をつく。

龍一「お、おい！」

榊原「大丈夫か！？」

蒼牙「はあはあ・・・（何なんだ、これは・・・）」

・・・

レイ「ご苦労だな、アイリ。」

色「可愛いわりに結構迫力あったぜえ！！」

マコ「色、はしゃぐのはやめなさい。」

アイリ「・・・」

アイリは何も言わずその場から立ち去ろうとする。

???「・・・無駄な抵抗はするなよ。」

アイリ「わかってるわ・・・ねえそれより本当なの？さっきの話。」

???「嘘をつく必要がどこにある？・・・かつて我が同じだったのだ、間違いはない。」

アイリ「・・・そう。」

・・・

少し時間が戻り港・・・

???「ありがとつなオヤジさん、ほらお前もお礼を言え。」

???「ありがとつおじさん。」



オヤジサン「おれなんていらへんて！！困ってる時はお互い様やないか、タクヤ君に紗耶香ちゃん。」

港には世界を旅しているはずのタクヤと紗耶香がいた。

オヤジサン「それにタクヤ君は命の恩人やからな。」

タクヤ「いや、にしてもまさかオヤジサンがメデューサの残党に襲われるなんて思わなかった。」

紗耶香「タクヤは変身して助けたんだよね？」

オヤジサン「感謝してるで？でも恩人が金すられたから船に乗せてなんて結構ドジっこなんやな？」

タクヤ「それは言わない約束・・・！？」

突如空に映像が映し出された。

タクヤ「仮面ライダーにアイリ？世界の救済？何言ってるんだ？」

紗耶香はタクヤにしがみつく。

紗耶香「怖い・・・」

タクヤ「安心しろ。」

オヤジさん「えらいことになったな。」

タクヤ「オヤジさん、紗耶香を頼む。」

オヤジさん「行くんか？」

タクヤ「ああ、久しぶりに骨が折れるかもしれないけどな、紗耶香、オヤジさんと一緒にいるんだぞ？」

紗耶香「・・・うん。」

オヤジさん「紗耶香ちゃんはまかせとき！！」

タクヤ「頼む！」

タクヤは街に向かった。

つづく

## ヤイバの力

タクヤは街に向かっていた、その途中

タクヤ「!?. . .どこまでついてくるつもりだ?」

タクヤは背後から何者かが跡をつけているのに気づいた。

???「鋭いなあ、驚いたよ。」

タクヤ「あんた誰だ?」

. . . . .

一方蒼牙はある空き地に来ていた、そう、そこは蒼牙が人間の時最後に来た場所だった。

蒼牙「アイリ. . . どうして. . .」

蒼牙は何故アイリがシャドウと協力するのか考えていた、すると

???「蒼牙. . .」

蒼牙「!?.」

蒼牙は後ろから誰かに話しかけられた、それはアイリだった。

蒼牙「アイリ!!」

蒼牙はアイリの肩を掴む。

蒼牙「アイリ！！何でシャドウに協力しているんだ！？」

アイリ「・・・あなたには関係ないわ。」

蒼牙「関係ある！！・・・まさか俺が原因なのか？俺がいつもお前のそばにいてやれないからか！？教え・・・！？」

するとまた蒼牙は原因不明の胸の痛みに襲われた。

蒼牙「ぐっ・・・はあはあ・・・」

アイリ「蒼牙！？」

「？？？」「苦しいか？」

蒼牙、アイリ「！？」

2人は声がしたほうを見るとそこには仮面ライダーヘル・????がいた。

蒼牙「お前・・・ぐっ・・・一体何なんだ！？」

蒼牙は無理やり叫んだ。

「???」「お前は死ぬ・・・ヤイバの力によってな。」

蒼牙「な・・・に？」

「蒼牙!!」

龍一と榊原が蒼牙のもとに駆けつけた。

龍一「お前はたしか仮面ライダーヘル!?」

榊原「悪の仮面ライダーか。」

???「悪?・・・我はこの世界を救いに来た、救済に犠牲はつきものだ。」

???はあくまでも自分が正義だと言い切った。

龍一「何が救済だ!!アイリ、お前も何で!？」

アイリ「・・・仕方ないじゃない・・・」

榊原「アイリさん?」

???「教えてやろう、我はかつてその力でプロトを封印した者、セイヤだ。」

一同は驚愕した。

龍一「お前が昔ヤイバだったのか?」

セイヤ「そう、そしてプロト封印後我は死んだ、ヤイバの力が暴走した事で体が崩壊したのだ。」

榊原「じゃあ今蒼牙の体に起こってるのはまさか!？」

セイヤ「そう、ヤイバの力の暴走だ、いずれそいつの体は滅ぶだろう。」

蒼牙「じゃあ・・・お前はなんで・・・」

セイヤ「我はこのヘルの力により蘇ったのだ、そして我がかつて命をかけ救った世界の現状をみて絶望した。」

榊原「現状？」

セイヤ「我は戦ったのだ、この世界から悲しみ無くすために・・・だが!!」

セイヤは拳をギリギリと握りしめる。

セイヤ「我はこの世界を守る必要なんてなかった、なぜなら!!」

「いくら頑張っても人間が変わらないからか？」

アイリ「あ・・・」

龍一「タクヤ!？」

タクヤが蒼牙達の前に現れた。

セイヤ「そうだ!!我がいくら命を変えても争いや破壊を人間はやめない、いややめようとしてもしない、だから我が作り替えるのだ、世界の未来を!!」

榊原「未来を変える？」

セイヤ「そうだ、そのために今の人類には滅んでもらう、なあに、新しく美しい世界のためだ人間達もわかるだろう、自分達がやってきた愚かさを。」

蒼牙「ふざける・・・な・・・」

蒼牙がヤイバスパーカーを構えるがタクヤがそれをとめる。

タクヤ「馬鹿、死ぬ気か？」

蒼牙「でも・・・」

セイヤ「お前達は邪魔になる、ここで消えてもらおう。」

セイヤがベルトを取り出すが突如炎がセイヤを襲う。

セイヤ「!？」

????「好き勝手言っちゃって!!」

龍一「なっ・・・今の声・・・まさか!？」

すると目の前に仮面ライダーケンが現れた、もちろん龍一が変身したわけではない。

龍一「三鳶・・・三鳶なのか!？」

ケン「おう、久しぶり!!」

それはかつて死んだはずの龍一の仲間・三寫大介だった。

ケン「話は後だ、とりあえずこいつを・・・」

セイヤ「予想外だな、一旦ひくか・・・行くぞ。」

アイリ「ええ。」

セイヤとアイリは目の前から消えた。

蒼牙「待て!!」

ケン「無駄だよ追っても、少し休みなよ。」

・・・

龍一「三寫・・・本当に?」

三寫「俺はウソつかない!!」

榊原「君が龍一に仮面ライダーの力を与えた三寫大介?」

三寫「そう、途中そいつに会ってここまで来たんだ。」

そいつとはタクヤの事だ。

・・・

数分前



タクヤ「何だお前は？」

街に来る途中タクヤは1人の男に呼び止められた。  
その男が三鳶大介だった。

三鳶「俺は三鳶大介、元スーパーネガシヨッカーの戦闘員で今は・  
・うゝん、何だろうな？」

タクヤ「は？」

三鳶「悪い悪い、んで本題だ・・・炎舞龍一って知ってるか？仮面ライダーの。」

その瞬間タクヤは腰についている護身用ナイフを取り出し三鳶の顔まで持っていき当たる寸前で止めた。

タクヤ「?・・・まばたきすらしないとほただもんじゃないな、何者だ？」

三鳶「だから三鳶大介だって、龍一の仮面ライダーの力は元々俺が開発してあいつに託したんだ、知ってて当然だろ？」

タクヤ「・・・・・」

タクヤはナイフを腰に戻した。

三鳶「良かった良かったわかってくれて。」

タクヤは三鳶の話を聞いた。

タクヤ「過去から？」

三鷹「ああ、スーパーネガショッカーの時間転移装置でな、まあ俺はもうこの時間では死んでるしかたがついたら過去に戻るがな。」

タクヤ「そうか。」

・・・・・・

龍一「だが疑問が残るな、過去の時代で何故未来であるここの出来事がわかったんだ？俺に仮面ライダーの力を与えたのも。」

三鷹「スーパーネガショッカーには未来を予測できる装置があつてな、二回くらい使ってみたんだが・・・最初と内容が変わっていたんだ。」

榊原「まさかシャドウが？」

三鷹「ああ、そこで俺が死ぬのも龍一が仮面ライダーになるのも知った。」

タクヤ「なるほど、だから助太刀に来たのか。」

三鷹「だが武藤君がこんな状況じゃきついな、ヤイバは最後の希望だからな。」

蒼牙「希望？」

三鷹「仮面ライダーヘル・セイヤを倒せるのはヤイバだけなんだ。」

タクヤ「なら難しいな。」

蒼牙「そんな事・・・!？」

蒼牙は再び苦しみだした。

榊原「苦しみが激しくなってる、まずは場所を変えよう。」

一同は蒼牙の家に向かった。

つづく

## 突撃

蒼牙の家

三鳶「とりあえずどうするか・・・おい武藤君、どこに行く気だ？」

蒼牙はこっそり家から出て行く気だった。

榊原「まさかその体で行く気なのか!？」

蒼牙「でもこうしてる間にもアイリに何かがあつたら・・・」

すると突然龍一が蒼牙を殴りつけた。

龍一「てめえ少しは身の状況を考えろ!!アイリはお前が助けなきゃいけないんだぞ!?!お前が死んだら誰がアイリを助けるんだ!?!」

蒼牙「でも!!」

そこに

タクヤ「悪魔で推測だが、シャドウには蒼牙を助ける方法があるんじゃないか？」

三鳶「どついう事だい？」

タクヤ「シャドウにはヤイバの力を抑える何かがある、だからアイリはシャドウに協力しているフリをしてるとか？」

榊原「確かにアイリさんにはプロトの一員だった頃の技術がある、探しだせるかもな。」

タクヤ「とりあえず蒼牙、お前は少し眠ってろ。」

タクヤは蒼牙の腹を殴りつけ気絶させた。

龍一「どうするんだ？これから。」

三鳶「シャドウに攻め込むか？」

榊原「まだ早いんじゃないか？ヤイバの力を抑える方法を見つけるまでは。」

タクヤ「とりあえず榊原は蒼牙を見ていてくれ、後は俺たちがなんとかする。」

榊原「わかった。」

タクヤ、龍一、三鳶は家を出た。

・・・

その頃

アイリ「・・・違う・・・これでもない・・・これも・・・」

色「おゝい!!」

アイリ「!？」

アイリは手に持つ何かを後ろにして隠した。

アイリ「な、何!？」

色「?、お前今何を隠した？」

アイリ「べ、別に・・・何も？」

色「なあんか怪しいなあ？」

アイリは若干冷や汗をかいていた。

色「まあいいや。」

色はその場を去った。

アイリ「危なかった・・・えっと・・・ん?これってもしかして・・・」

・・・

龍「よくよく思ったけどシャドウがどこにいるかわかんないのに俺たち突っ走ってたな(汗)」

タクヤ「・・・ダメだ気配を感じ取れない。」

三鷹「うゝん・・・そういえば映像流れた時に映ってた風景・・・なんか心当たりない？」

龍一「映像の風景？」

龍一は記憶をたどる。

龍一「あつ、あれは確か・・・」

三鳶「知ってるのか？」

龍一「ああ、警察署だ。」

タクヤ「警察署？お前が所属している？」

龍一「そうだ、行こう！！」

龍一達は警察署に向かった。

・・・

龍一達が警察署に向かう途中携帯電話がなった。

龍一「ん？榊原か？」

それは榊原からの電話だった。

榊原「大変だ龍一！！蒼牙が窓ガラスを突き破って逃げ出した！！」

龍一「なに！？」

三鳶「ダイナミックだねえ武藤君は。」

龍一「感心してる場合か！？まさかあいつも警察署に！？」

榊原『映像の風景に見覚えがあるって言ってたから恐らく！！』

するとタクヤが龍一から携帯電話を奪った。

龍一「あ、おい！！」

タクヤ「後は俺達に任せろ、榊原は市民の避難を頼む。」

榊原『わかった！』

タクヤは電話をきり龍一に返した。

タクヤ「奴も俺達も行く場所は同じだ、どうせ鉢合わせになる。」

龍一「なんとしても止めないとな。」

三鳶「そうだな。」

・・・

一方

蒼牙「はぁ・・・はぁ・・・ぐっ！？」

蒼牙は再びヤイバの力に襲われ膝をつく。

蒼牙「はぁ・・・まだだ・・・アイ・・・リ・・・くう！！」



蒼牙は無理やり立ち上がり警察署に向かった。

蒼牙「くそ・・・遠く感じる・・・!!」

警察署が見えてきたあたりで龍一達がいた、まだ気づかれていないようだ、蒼牙は物影に隠れる。

龍一「蒼牙はまだ来てないのか？」

タクヤ「足跡がないな、そうみたいだ。」

・・・

蒼牙「近づけない・・・ぐっ・・・」

蒼牙は胸をおさえる。

・・・

三寫「俺達はどうすんの？先行くのか？」

タクヤ「蒼牙にかんしては・・・まあ・・・」

タクヤ達が悩んでいると

????「諦めないのね。」

タクヤ達は警察署のほうを向くとマコがいた。

マコ「しつこいと嫌われるわよ？」

龍一「悪いな、嫌われようが何だろうが関係ないんだよ。」

タクヤ「俺は先に行く。」

三寫「・・・んじゃ俺は龍一と頑張りますか。」

龍一「2人のケンか、よし。」

龍一と三寫にベルトが現れる。

龍一、三寫「変身!!」

2人は炎に包まれ仮面ライダーケンに変身した。

ケンM「ローマ字付きか。」

ケンR「何がだ?」

ケンM「何でもない。」

タクヤは警察署に向かった。

マコ「あなた達はここで葬るわ。」

マコはベルトを装着する。

マコ「変身。」

マコは仮面ライダーデッドに変身しムチを構える。

・・・

タクヤは警察署の中に入った、しばらく進むと誰かが横たわっていた。

タクヤ「ん？・・・そ、蒼牙！？」

それは激しく息切れをする蒼牙だった。

蒼牙「はあはあ・・・よお・・・タクヤ・・・」

タクヤ「お前どうやって・・・」

蒼牙「裏に回って・・・非常口から・・・ぐあ！？」

蒼牙は既に限界に近づいていた。

タクヤ「馬鹿！！お前が死んだらどうするんだ！！ここでおとなしくして・・・」

すると蒼牙はタクヤの胸ぐらを掴んだ。

蒼牙「頼むタクヤ・・・これは・・・俺がかたをつけなくちゃいけないんだ！！アイリは俺が助けなくちゃいけないんだよ！！アイリが俺を助けようとしてるならなおさら！！」

タクヤは今にも閉じそうな蒼牙の目から発せられる気迫を感じた。

タクヤ「だがもしヤイバに変身してお前が死んだら・・・お前は最

後の希望なんだぞ。」

蒼牙「なら・・・すぐに終わらせるさ・・・俺はプロトもメデューサを倒した・・・仮面ライダーだぜ？」

タクヤ「!!!」

その言葉にタクヤは決心した、こいつを止めるのは止めようと、そこに

???「お話は終わったか？」

そこにはレイがいた。

タクヤ「蒼牙、行け。」

蒼牙「ああ。」

蒼牙は何とか立ち上がり奥へ向かっていった。

レイ「止めないのか？」

タクヤ「ああいう馬鹿には何言っても無駄だしな、それに・・・」

タクヤはシャイバボルターを取り出した。

タクヤ「ああいう馬鹿にしか出来ないんだよ・・・ヘルを倒すのは!!!」

タクヤはシャイバボルターを装着する。

タクヤ「変身!」

タクヤは仮面ライダーシャイバに変身した、レイもベルトを装着する。

レイ「変身!」

レイは仮面ライダーブラッドに変身した。

つづく

## 突撃（後書き）

次回、謎の仮面ライダーが登場！！

炎、黒雷、そして神

デッド「はぁ!!」

デッドは鞭を振るう、ケンMはそれをかわしデッドとの距離をつめる。

ケンM「ふっ！ほっ！うわぁ!？」

しかし鞭が顔面を直撃した。

ケンR「鞭にかんしては名人だな。」

デッド「諦めなさい。」

ケンR「だから俺達は諦めが悪いんだよ!!」

ケンRがリングを上空に投げると炎の龍が現れリングに宿りメダルとなった。

ケンM「へえ、進化したなあ。」

ケンRはメダルをベルトに付け回すと全身が炎包まれドラゴニカフオームになった。

ケンR「こっからが本番だ!!」

.....

シャイバ「はあ！！」

ブラッド「ふっ！」

シャイバは剣でブラッドの振るうナイフをはじく。

シャイバ「危ない危ない。」

ブラッド「わかっているようだな。」

シャイバの使う剣はブラッドのナイフと比べリーチが長くブラッドが不利に思えるがリーチが長い分接近戦にむいているナイフはある程度距離をつめると剣が不利になる、どちらも油断出来ない状態なのだ。

シャイバ「ふところに入られたら終わりだよな。」

ブラッド「悪いが・・・入らせてもらう！！」

ブラッドがナイフを構え走ってきた。

シャイバ「ぐっ！？」

シャイバは剣を振るうがブラッドは体を仰け反らせてかわしシャイバの剣を蹴り飛ばした。

ブラッド「はあ！！」

シャイバ「やばい！！」



シャイバはとつさにマフラーを外しブラッドの腕に巻きつけ投げ飛ばした、ブラッドはうまく体制を整えて着地する、シャイバはマフラーを巻き直す。

ブラッド「ヒヤヒヤしたろ？」

シャイバ「ああ、一瞬真っ青になったよ。」

シャイバは剣を拾い上げ構える。

・・・・・・

蒼牙は映像に映っていた背景のある場所・署長室の目の前で来た。

蒼牙「はあはあ・・・ここだ。」

そこに

????「もういねえよ。」

蒼牙「!？」

そこには色がいた、既にベルトを巻いていた。

色「セイヤは別の場所に行ったぜ、まあここじゃなんだ・・・へえええんしいいん!!」

色はデスに変身、蒼牙の胸ぐらを掴んで飛び上がり天井を突き破って屋上まで来た、そして蒼牙を乱暴に投げ飛ばした。

蒼牙「ぐっ．．．くそ．．．」

デス「どうする気だろうなあ？あの女連れて。」

蒼牙「ア．．．アイリを？．．．ぐっ！？」

ヤイバの力は徐々に蒼牙の体を蝕んでいく。

デス「あゝあ、あんな女の事より自分の心配すればあ？」

蒼牙は拳を握り締めた。

蒼牙「うるさい．．．アイリは．．．俺を支えていてくれた．．．  
いつつもどんな時でもな．．．」

．．．．．

「あなた、名前は？」

．．．．．

「あなたは世界で一人だけの武藤蒼牙なのよ？」

．．．．．

蒼牙「お前に．．．あんな奴呼ばわりする資格はねえ！！」

デス「あゝあ、うざ．．．」

デスはメリケンを手にはめる。

デス「楽しんでやるよ。」

蒼牙「くそ・・・こんな所で・・・」

デスが蒼牙にゆっくり近づいていく。

デス「ガツンと思いつきり・・・!？」

蒼牙「!？」

すると突然空から一筋、二筋と光が差し込む。

蒼牙「な、何だ？」

デス「眩しっ!？何だ一体？」

光から一人の人のような影が現れまるで神のように舞い降りた。

???「・・・よく苦しいのに頑張るな、お前。」

デス「何だお前？」

その人物は金髪で青い瞳をし、全身白い正装の男だった。

蒼牙「えっ・・・危ないから早く逃げて!!」

???「いや、逃げるつもりはない。」

デス「かつこいいい出方で正義の味方きどりかあ？」

「??? はあ・・・正義とか悪とか関係ないんだよ、ただお前達のやってる事が気に入くないんだよ。」

「??? はバックルと十字架のような物を取り出しバックルに十字架をはめふたを閉じるとベルトがのび腰にまかざる。  
そして両手をゆっくり下から上へ回し胸元にクロスしとめる。

「??? 「変身。」

「??? はそう呟き両側のスイッチを押す。

「オープンフォーム!!!ゴッド!!!」

ベルトからボイスが発せられると金の十字架が???の背後に現れると同時にその十字架は???の体を包み姿を変えた。

蒼牙「なっ・・・」

デス「ええ!?!」

その姿は金の体に銀の装甲、胸の中心に赤い十字架、金の頭部に銀の細いX字の仮面がつき赤い複眼があった。

デス「ま、眩しいんだよ!!!」

デスは???に殴りかかったがゴッドはそれをあっさりとかわし蒼牙に駆け寄る。

「??? 「大丈夫か?」

蒼牙「き、君は？」

???は蒼牙を起きあがらせる。

???「俺は仮面ライダーゴッド、早く行け。」

蒼牙「あ、ありがとう。」

蒼牙はバイクとサーフィンを携帯で呼び出し合体させる。

デス「行かせるか!!」

デスは襲いかかるがゴッドがそれを受け止める。

ゴッド「はあ!!」

ゴッドはデスを蹴り飛ばす。

デス「ぐあ!？」

ゴッド「これでどうだ？」

ゴッドは胸元に手を持っていくと赤い十字架が現れる、そして銀の十字架をはめ込むと鎗に変形した。

ゴッド「だあ!!」

ゴッドはデスを鎗で攻撃する。

デス「この・・・おらぁぁ!!」

デスはゴッドを殴りつけるが槍で受け止めデスの胸ぐらを掴み投げ飛ばした。

デス「ぐぁぁぁ!!?」

デスは地面に叩きつけられる。

ゴッド「まだいたのか、早く行け。」

蒼牙「あ、ぁぁ。」

蒼牙はバイクに乗り飛び立つ。

デス「こ・・・このやろぉぉ!!」

ゴッドは槍の銀の十字架を外し槍から十字架に戻す、そしてバックルの十字架を取り付ける。

「ゴッド・パワー!!」

ゴッドの十字架が金に輝きだす。

デス「やぁぁぁぁぁ!!」

ゴッド「デヤァァァ!!」

ゴッドは十字架を構え投げつけそれがデスのベルトに直撃した。

デス「ぎゃぁぁぁ!!?」

デスはベルトが破壊され消滅した、ゴッドの手に十字架がブーメランのように戻る。

ゴッド「・・・さて帰るか、早くしないとあいつづるさいからな。」

ゴッドはその場から消えた。

・・・

シャイバ「はあー!!」

ブラッド「ぐっ!？」

シャイバはブラッドを蹴り飛ばした。

ブラッド「なかなかだが・・・これで最後だ。」

ブラッドのナイフが赤黒く輝く。

シャイバ「勝負だ。」

「SYAIBA charge!!」

シャイバの剣も赤黒く輝く。

ブラッド「はあー!!」

シャイバ「だあー!!」

ブラッドがナイフを突きだすがシャイバがそれを剣で弾き返し懷を斬りつけた。

ブラッド「ぐっ・・・」

ブラッドは消滅した。

シャイバ「はあはあ・・・よし。」

・・・

デッド「ホラホラどうすんのよ？」

デッドは鞭を振るいケン達を近づけさせない。

ケンR「んなろお!!」

するとケンRは鞭を掴み炎を発した。

デッド「なっ!？」

ケンM「ナイス!! だあ!!」

ケンMは拳から炎を発してデッドを殴りつける。

デッド「くう!？」

ケンR「行くぞ三鳶!!」

ケンM「おう!!」



2人のケンは足に炎を発してデッドを蹴り飛ばした。

ケンM、R「おりゃあああ！！」

デッド「きゃあああ！？」

デッドは炎に包まれて消滅した。

つづく

炎、黒雷、そして神（後書き）

ゴッドはW f o r e v e rでいうとオーズサイドです

## ケジメ

蒼牙はバイクで飛行していた、しかしヤイバの力は着々と体を蝕んでいた。

蒼牙「く・・・もしかしたらあそこに・・・」

蒼牙はある場所に降り立ち既に限界をむかえている体を無理やり動かし歩く。

・・・

セイヤ「ここは知ってるだろう？」

アイリ「ええ、あなたがプロトを封印した場所。」

セイヤとアイリはかつてプロトが封印された山に来ていた。

アイリ「ここには不思議な力はあるけど何をするつもりなの？」

セイヤ「プロトを復活させる。」

アイリは驚愕した。

アイリ「プロトを復活って・・・気は確かなの！？それに首領はマダラ達は蒼牙達に倒されて・・・」

それを遮るようにセイヤが言った。

セイヤ「ここにある不思議な力は・・・ヤイバの力だ。」

アイリ「えっ？」

セイヤ「混乱しているようだな、説明してやろう。」

・・・

かつて我はここでプロト首領と決戦を繰り広げていた、一步も譲れない騒然なものだった。

首領「はあはあ・・・」

ヤイバ「はあはあ・・・だあ!!」

首領「!？」

我は渾身の力で首領に一撃を与えてヤイバの力をこの山に蓄積しプロトを封印した、そして・・・

ヤイバ「よし・・・ぐっ!？ぐああ!？」

体に残ったヤイバの力は我の中で暴れ出し我が消滅すると同時にどこかへ飛んで行った。

・・・

アイリ「もしかしてそれを偶然生きていたマダラ達か？」

セイヤ「そうだ、そして・・・」

セイヤは石で出来た剣を地面に突き刺した。

セイヤ「今こそ蘇れ、プロトよ!!」

石の剣には山に蓄積されたヤイバの力が集まり何かを目の前に放った。

アイリ「そんな・・・悪しき力を持つものには力は使えないはず・・・」

セイヤ「これは我の力だ、最終的に扱えるのは我だ。」

石の剣から放たれた何かはだんだん見たことのある姿に変わっていった。

アイリ「あ・・・ああ!？」

そしてそれは完全に現れた、アイリは声を出せない。

セイヤ「久しぶりだな、プロトの諸君。」

モグル「ああ、なんか体なまっただなあ。」

カーズ「まさかヤイバに復活させてもらうなんてね。」

セイヤ「今はヤイバなどではない、ヘルだ。」

マダラ「そっだな、お？アイリじゃないか。」

アイリ「ひ、久しぶり・・・」

セイヤ「彼女にあまり近づくなよ？あそこにいる奴がなにかとるさいからな。」

一同「!?!」

セイヤが指を差した所には蒼牙がいた。

蒼牙「よぉ・・・」

アイリ「蒼牙!!」

アイリが蒼牙に寄り添う。

アイリ「蒼牙・・・こんなになってまで・・・」

蒼牙「へへ・・・たり・・・前だ。」

蒼牙は言葉も話すのがやっとなった。

モグル「どうするんだい？」

カーズ「ここはやったほうが良いんじゃないかしら？」

マダラ「確かに。」

セイヤ「いや、まだあいつにはやってもらわなければならない事がある。」

セイヤは石の剣を引き抜いた。

セイヤ「アイリ、これで奴を殺せ。」

セイヤはアイリの足下に石の剣を投げる。

セイヤ「それで奴を殺しヤイバの力を吸い取れ。」

セイヤの石の剣にはヤイバの力を吸い取る力があるようだ、アイリはそれを持ち上げる。

モグル「お？」

カーズ「ふふっ」

マダラ「ほお。」

蒼牙「！・・・はあ・・・」

蒼牙は既にあきらめかけていた、どちらにせよヤイバの力がアイリの石の剣で殺されると感じていた。

アイリ「・・・」

蒼牙「・・・」

アイリ「・・・馬鹿。」

蒼牙「えっ？」

アイリは剣を投げ捨て何かを取り出した、青い小さな水晶だった。

セイヤ「ん？」

アイリ「飲んで。」

蒼牙「・・・？」

アイリ「早く飲みなさい！！」

アイリは強引に蒼牙に青い水晶を飲み込ませた。

蒼牙「んぐ！？げげげほ！！お前いきなり何を・・・」

アイリ「気分は？」

蒼牙「良いわけ・・・あれ？」

蒼牙は異変に気づいた、さっきまでの苦しさが嘘のように無くなっていたのだ。

マダラ「お、おい！どうなって・・・」

セイヤ「まさか・・・お前・・・だがどうやって・・・」

アイリ「そうよ、蒼牙からヤイバの力を消滅させたわ、でも・・・蒼牙はヤイバになれる。」

蒼牙「アイリ、どういう・・・」



アイリは説明をした。

.....

私はあいつらの所に潜入してある事を調べてたの、ヤイバの力を抑える方法は無いかって、でも結局無かった、それである時・・・

アイリ「もう！！どうしたら良いのよ・・・ヤイバの力を抑える方法なんて・・・無いのかしら、せめてヤイバの力を消滅させられたら・・・消滅？」

アイリはふとディリーモードとタッチブレスを取り出した。

アイリ「破壊の戦士の力・・・もしかしたら・・・」

.....

アイリ「このディリーモードにはある破壊者の力が組み込まれているの、その力を青い水晶に凝縮させて蒼牙の体内にあるヤイバの力を破壊したのよ、おかげでこのディリーモードは空箱みたいになっちゃったけど。」

セイヤ「考えたな、だがどうする？ヤイバの力を体内から無くしても再び変身すればまた体内にヤイバの力が入り込むんだぞ？」

しかしアイリには戸惑いの様子がみられなかった。

アイリ「私も最初はどうかと思っただけどびっくりしたわ、青い水晶が体内に残るってわかった時は！！」

セイヤ「な、何!？」

蒼牙「じゃあ、まさかアイリ!」

アイリ「ええ、アイリはヤイバの力をコントロール出来るようになったも同然なの。」

蒼牙は青い水晶を飲み込んだ事でヤイバの力を自由に使う事出来るようになったのだ。

アイリ「蒼牙、あなたは最後の希望・・・だから!!」

蒼牙はアイリの手を握る。

蒼牙「信じて正解だぜ、さすが俺の妻だな。」

アイリ「・・・ならあなたも絶対に勝ちなさい、私の夫なんだから。」

蒼牙はヤイバスパークを装着する。

蒼牙「当たり前だ、セイヤ!!!」

蒼牙はセイヤを指差す。

蒼牙「お前は俺が絶対に倒す、覚悟しろ!!変身!!」

「change YAIIBA!!」

う  
う  
う  
う

## ヤイバ復活

「change YAIIBA!!」

蒼牙は仮面ライダーヤイバに変身した。

ヤイバ「今日がお前達の・・・命日だ。」

ヤイバは剣を構える。

モグル「へっ、病み上がりになんか出来る!!」

モグルがヤイバに殴りかかる。  
しかしヤイバはそれをかわす。

ヤイバ「はああああ!!」

そしてモグルを斬り捨てる。

モグル「ぐあっ!?!」

カーズ「はあ!!」

マダラ「ふっ!!」

カーズとマダラもヤイバに襲いかかりヤイバは3対1の不利な状況になった。

ヤイバ「おるあ!!!だあ!!」

カーズ「ぐっ!? ああ!？」

マダラ「ぐおっ!? ば、バカな・・・」

モグル「何だよ、何だよ!? あいつあんなにフラフラだったじやねえか!？」

プロトの幹部は3人がかりでもヤイバにかなわなかった。

セイヤ「・・・」

ヤイバ「アイリ!・・・いつも悪いなあ!！」

アイリ「えっ?」

ヤイバ「いつも何かあつてそばにいてやれなくさあ!！」

アイリ「蒼牙・・・わかってるならさっさと終わらせて時間作りなさい!！」

ヤイバ「わかったよ!! 行くぜ!！」

「change dash!！」

ヤイバはダッシュモードに変わりモグルに高速攻撃を繰り返した。

ヤイバ「はああああ!！」

モグル「ぎゃああああ!？」

モグルは爆散した。

カーズ「このおー!!」

カーズは水の光線を放つ。

「change SUN!!」

続いてヤイバはサンモードに変わり光線を剣で斬り裂き炎の翼を広げ飛び上がった。

ヤイバ「うらあああ!!」

ヤイバは急降下し剣に炎をまとわせ真上からカーズを真つ二つに斬り裂いた。

カーズ「きゃあああ!?!」

カーズは消滅した。

マダラ「おのれえ!!」

マダラは爪をたてヤイバに襲いかかる。

ヤイバは通常の姿に戻る。

ヤイバ「最後だ!!」

「Y A I B A charge!!」

ヤイバは足に電撃をためる。

マダラ「このおー!!」

ヤイバ「だりゃあー!!」

ヤイバはマダラの懷に蹴りを放つ。

マダラ「があ!?!」

マダラは雷と共に消滅した。

アイリ「やったー!!」

セイヤ「ほう・・・」

セイヤはベルトを既に装着していた。

セイヤ「変身。」

セイヤは仮面ライダーヘルに変身した。

ヤイバ「アイリ、下がって。」

アイリ「ええ。」

アイリは下がりヤイバを見守る。

ヘル「どうやら完全にヤイバの力を使いこなせるようだな、大した奴だ。」

ヤイバ「アイリのおかげさ。」

ヘル「ふん。」

ヘルは大鎌を構える。

ヤイバ「来るか・・・」

ヘル「はああ!!」

ヘルは鎌を振り回す、ヤイバはそれをかわし反撃を試みるがヘルは持ち手でヤイバを突き飛ばした、ヘルは鎌を振るいヤイバはバク宙でそれをかわす。

ヤイバ「勝負だ。」

「change lightning!!」

ヤイバは最強フォーム・ライティングになりさらに雷から剣を作り出しヤイバブレードと雷の剣の二刀流になる。

ヘル「へあああ!!」

ヘルは鎌を投げつける。

ヤイバ「うおっ!?!」

ヤイバはそれをかわすがなんと鎌はブーメランのようにかえってきた。



ヤイバ「追尾!？」

ヘル「終わりだあ!!」

鎌がヤイバを襲うがヤイバは剣を振るう。

ヤイバ「だああ!!」

ヤイバは飛んでくる鎌を斬り裂き回避したのだ。

ヘル「何!？」

ヤイバ「行くぜ!!おらあ!!」

ヤイバはヘルを二刀で斬りつけ追い詰める。

ヘル「ぐあっ!？」

ヤイバ「さあて・・・最後だ!!」

ヘル「まだだ、うおおおおおおお!!」

ヘルは雄叫びをあげると山が震えだした。

アイリ「きゃあ!？」

ヤイバ「な、なんだ!？」

すると地面からヘルに向かって雷が放たれヘルの体に入り込む。

アイリ「あれって・・・ヤイバの力!？」

ヤイバ「まだここに残ってたねか!？」

ヘルからはおぞましい赤黒い光を放ちながら赤い翼をひろげ飛び立つ。

ヤイバ「ヘルとヤイバの力をひとつにしたのか!？」

ヤイバは携帯でバイクを呼び出しアイリを乗せた。

アイリ「そ、蒼牙!？」

ヤイバ「ここは危険だ!! 離れろ!!」

アイリ「そんなこと!？」

ヤイバはバイクのスイッチを押し飛び立たせた。

アイリ「蒼牙!？」

ヤイバ「心配すんな!! 必ず戻る!!」

すると赤い鞭のような光がヤイバを縛り上げる。

ヤイバ「ぐっ!？」

その鞭はヘルのも物だった。

ヘル「ふん!!」

ヤイバ「うわぁ!?!」

ヤイバは引き上げられた。

ヘル「この力、もはや我にも止められない!!」

ヤイバ「哀れな奴だな、世界を破壊しようとして自分の力で身を滅ぼすなんてな!!」

ヘル「黙れ!!」

鞭からとてつもない力が発せられた。

ヤイバ「ぐああああ!!?!」

ヘルは空中でヤイバを鞭から解くが落下させる間も与えないように鞭を叩き込む。

ヘル「これは破壊ではない復興だ!!貴様も同じように思ってるのだれう!?!」

ヘルは再び鞭でヤイバを縛り上げる。

ヤイバ「ぐっ・・・いや、この世界も悪くないぜ?」

ヘル「何?」

ヤイバ「どんな状況になっても俺の事を愛してくれる奴がいるから



## 声援

アイリを乗せたバイクは着陸しアイリはバイクから降りる。

アイリ「蒼牙……」

「アイリ!!」

そこに龍一、榊原、タクヤがたどり着く。

榊原「住民の避難は何とか終わった。」

アイリ「そう……蒼牙!？」

空を見上げるとヘルに苦しめられるヤイバの姿があった。

龍一「やばいぞ!!」

タクヤ「……」

……

ヤイバ「ぐああああ!？」

ヘル「はああああ!!」

ヤイバはヘルの攻撃を受け続けていた。

……

アイリ「蒼牙、負けないで！！蒼牙！！」

榊原「蒼牙！！頑張れ！！」

龍一「こんな所で終わんな！！」

タクヤ「待つてる人がいるぞ、蒼牙！！」

・・・

???「おお！？そう君が危ないゾ！？」

一方とある家族がヤイバの戦っている姿を見守っていた。  
それはかつてヤイバと共に世界を救った野原しんのすけとその家族  
だった。

ひろし「頑張れ蒼牙君！！」

みさえ「私達が応援してるわよ！！」

ひまわり「たやあ！！」

シロ「ワン！！」

しんのすけ「そう君負けるなあ！！フアイヤアア！！」

・・・

???「あれは蒼牙さん！？」

また別の場所では大勢の少女達がいた、それもかつてヤイバと共に世界を救ったプリキュアである。

なぎさ「頑張って!!」

咲「私達がついてる!!」

のぞみ「負けないで!!」

つぼみ「蒼牙さんが勝つと信じてます!」

響「いつけええ!!」

ラブ「頑張って・・・蒼牙さん!!」

・・・

港では

オヤジさん「頑張れ仮面ライダー!!」

紗耶香「仮面ライダー!!」

・・・

ヤイバ「ぐああ・・・!?この力は・・・」

ヘル「な、なんだ!?!」





ヤイバ「うらあ!!」

ヘル「ぐああ!?!」

ヘルは地面に叩きつけられる。

ヤイバは静かに地面に降りる。

ヘル「ば、馬鹿な・・・はああ!!」

ヘルは殴りかかる、ヤイバはそれを片手で受け止め反撃をする、ヘルがそれをかわし鞭を振るうがヤイバはそれを側転とバク転でかわし剣を構える。

ヤイバ「終わりだ・・・お前の野望も・・・思いも!!」

ヘル「ほざけ!!」

ヘルは鞭を投げ捨て翼を広げたとすると羽が無数に散らばりヤイバを襲う。

ヤイバ「はあああああ!!」

ヤイバは炎と雷を剣にまわせ振るい羽をすべて斬り捨てた。

ヘル「何!?!」

ヤイバ「はっ!!」

ヤイバは金の翼を広げ飛び上がる。

「SUN charge!!」

「lightning charge!!」

2つの力を片足にまわせ突き出しヤイバは急降下する。

ヤイバ「はあああああああああああ!!」

ヤイバの技はヘルに直撃した。

ヘル「ぐああ!?!き、貴様・・・世界を人類の好きにさせるつもりかあ!?!」

ヤイバ「違う!!お前もヤイバだったならわかるだろ!?!かつて何故人々を助けていたのか、何故世界を守っていたのかを!?!」

ヘル「人類を守っていたわけだと!?!」

ヤイバ「そうだ、思い出せ!!ヤイバ!!」

ヘル「ぐあああああ・・・」

・・・

「現れたな、プロト!!」

「ヤイバだ!!」

「ヤイバが助けにきてくれたぞ!」

『ヤイバ頑張つて!!』

我・・・俺は・・・人類が許せなかった・・・

・・・

蒼牙が倒れているセイヤの上半身を起こし抱える。

セイヤ「俺は必死に守ってきた、笑顔、優しさ、命・・・だが人類はそれを無視するかのよう・・・奪い合っていた・・・何故・・・」

蒼牙「確かにお前や、俺が必死に守ってきた物を人類は無視したかもしれない、俺達がやってきた事は全て無駄なのかもしれない・・・でも」

セイヤ「・・・何だ？」

蒼牙「それを支えてくれる人達が俺にいた・・・だからここままで人類に幻滅せずやってこれたんだ。」

セイヤ「仲間・・・という者達が・・・」

蒼牙「お前も・・・どこかでそんな人達と出会っていれば・・・俺と一緒に戦ってくれる仮面ライダーになっていたはずだ。」

セイヤ「・・・ははは・・・そうかもなあ・・・また笑顔とかのために戦いたくなった・・・」

蒼牙「思い出してくれたか・・・ならむこうで俺達人類を見守っていてくれ。」

セイヤ「・・・ああ・・・」

セイヤは砂となり風にのり消えた。

つづく

声援（後書き）

次回最終回

## 日常

数ヶ月後

蒼牙「まっずい！？遅刻だ遅刻！？」

アイリ「ちよつとネクタイ忘れてるわよ蒼牙！！」

あの戦いから数ヶ月後、また武藤家に日常が訪れた。

アイリ「はぁ、毎日毎日・・・まぁ・・・」

アイリは窓を開け空を見上げる。

アイリ「蒼牙が馬鹿したら天罰頼むわよ？セイヤ。」

・・・

数ヶ月前

蒼牙はヘルと戦いを終え山を降りみなと再会をした。

龍一「大丈夫か蒼牙！？」

蒼牙「ああ・・・」

榊原「良かったな・・・どうした浮かない顔して？」

タクヤ「どうせ敵に同情したんだろ？」

蒼牙「隠せないか。」

アイリ「あいつはどうなったの？」

蒼牙「これから世界を見守るって約束した。」

・・・

蒼牙「はあはあ・・・お？」

蒼牙は空を見上げる。

蒼牙「セイヤ・・・見ていてくれよ、これからの未来を!!」

蒼牙はその場から走り去った。

おわり

## 日常（後書き）

今回は仮面ライダーヤイバは完結です、たくさんの応援ありがとうございました。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9300u/>

---

仮面ライダーヤイバfinal 雷対影 時空大決戦

2011年8月11日22時28分発行